



MINATO

みなとユネスコ 会報

Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/HIROSHI NAGANO PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人/ 田部瑛一郎
Mail: m-info@minatounesco.jp https://minato-unesco.jp

2024年9月1日発行 第177号

目次

P. 1	巻頭言	P. 8	メキシコ料理教室
P. 2-4	2023年度 MUA シンポジウム	P. 9	MUA 2024年度秋季の開催事業紹介
P. 5	ゆかた着付け体験教室	P. 10	事務局便り
P. 6-7	大学ユネスコクラブ全国サミット		

忘れられない事件

港ユネスコ協会理事 福本芳朗



私は30年あまり記者をしていましたが、忘れられない事件の一つに、イギリスに駐在していた2003年の事件があります。インタビューした人物が、ある朝オックスフォード郊外の森の中で遺体で発見されたのです。

2001年ニューヨークの国際貿易センタービルへのテロを受けて、アメリカは「犯行の裏には大量破壊兵器を保持するイラクがいる。フセイン政権を打倒しないと世界の安全が脅かされる」と訴え戦争準備を開始しました。フランスやドイツが消極的な姿勢を見せる中、イギリスはアメリカに同調。「イラクは45分以内で大量破壊兵器を使用可能」とする報告書を発表し、

これを大義名分に参戦に踏み切ろうとしていました。

この政府の報告書に疑問を呈した専門家がいました。国連のイラク査察団のメンバーでイギリス国防省のアドバイザーを務めるデビッド・ケリー博士です。私はケリー博士の自宅でインタビューをお願いしました。

「この家は元々16世紀に建てられた農家なんですよ」穏やかな表情で博士が案内してくれた書斎には、査察官として30回以上も訪問した、イラクでの仲間との写真が飾られていました。博士は長時間に及ぶインタビューに終始丁寧に応じ、自分が査察した現場の写真を見せながら「どこにも大量破壊兵器は無かった」と証言しました。イギリス政府の大義名分を覆すこの証言は、日本でも大きな反響がありましたが、イギリス国内では「政府が報告書を捏造した」と大騒ぎになりました。

そして、ケリー博士は国会に呼び出され、厳しい質問攻めにあった後行方不明となり、翌日朝に、遺体が森の中でうつぶせの状態で見つかりました。左手首が切れており、「自殺」とされました。

戦争開始後、情報はアメリカ軍発表の情報と軍に管理された取材によるものに限られ、市民の犠牲者などの実情はカタールのアルジャジーラの映像くらいしか報じられず、情報統制が強く現実をゆがめていることを実感しました。

イラク戦争後、結局、大量破壊兵器は見つかりませんでした。フセイン大統領は故郷の北部チクリットで地下に潜んでいるところをアメリカ軍に発見され、死刑となりましたが「大量破壊兵器な

(P. 4へ続く)

2023年度 港ユネスコ協会 シンポジウム 私達の「あの戦争」との向き合い方を問う

日時：2024年3月7日（水）18：30
会場：港区立男女平等参画センター 学習室C
主催：港ユネスコ協会 共催：港区教育委員会
後援：公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟
東京都ユネスコ連絡協議会

モデレーター・シンポジスト：

手塚千鶴子氏 元慶應義塾大学 日本語・日本文化教育センター教授
シンポジスト：米倉律氏 日本大学法学部教授 元NHK 報道局ディレクター
（専門は、映像ジャーナリズム論、メディア史）
シンポジスト：荻本快氏 相模女子大学学芸学部准教授 臨床心理士

第二次世界大戦で「原爆が投下されたこと」に対して、「日本人の怒りはどこへ行ったのだろうか」をテーマに研究されてこられた手塚千鶴子先生をお迎えして、シンポジウムを開催いたしました。手塚先生から、米倉先生、荻本先生をご紹介いただいた後、ジャーナリズム、短歌、神話的思考の、それぞれ専門的な立場からご講演をいただきました。以下、要約です。

米倉律氏

■「八月ジャーナリズム」の特徴と問題点

八月ジャーナリズムとは、「原爆の日」から終戦記念日にかけて、新聞やテレビ、雑誌などで戦争関連の特集記事や特番が集中的に掲載、放送されること。



「八月ジャーナリズム」に取り上げられている主要なテーマは、原爆・空爆、窮乏生活・疎開、沖縄戦、アジア～太平洋戦線での激戦、満州など外地からの引き上げ、終戦～敗戦など、戦争における日本・日本人の「被害」「犠牲」が焦点化されていて、基調として「被害のジャーナリズム」という特徴があります。一方、「加害」については、アジア諸国への侵略、植民地支配、捕虜や市民の迫害・虐殺（南京虐殺）、強制連行・強制労働、731部隊、従軍慰安婦などあるが、日本は「被害」が大きかったこともあり、「加害」が過少に語られてきました。日本の戦争犠牲者は310万人、アジアでは約2000万人と推定されています。この中には、日本軍によって、日本の侵略によって加害を受けた人々もたくさん含まれていますが、「八月ジャーナリズム」には殆ど取り上げられていません。被害バイアスです。ここが研究の出発点。

1990年代前半～中頃（戦後50年の時期）、「八月ジャーナリズム」の中で、加害の問題を積極的に取り上げようと盛り上がった一時期がありました。元従軍慰安婦、元徴用工の方々が、日本政府や企業を相手に訴訟をおこし、河野談話・村山談話が出された頃です。

しかし1990年後半以降、再び、被害のジャーナリズムに戻ってしまった。2012年に成立した第二次安倍政権以降、特に、歴史・過去を振り返る姿勢が失われてきました。「八月ジャーナリズム」も、そうした時代の流れの変化の影響を受けてきたのです。

■「戦争記憶」の脱歴史化・脱文脈化

最近、気になるのは、戦争記憶の脱歴史化・脱文脈化の傾向です。戦争から時間が経過し、どう受け継いでいくかが、課題になっています。被爆者の平均年齢は85歳以上で、語り部の人達が少なくなっている中、テレビ番組や映画での顕著な傾向として、若い世代に戦争を身近な等身大として、自分ごととして捉えて伝えるような、表現上の工夫がなされています。代表作は、映画「この世界の片隅に」（2016年公開/監督片渕須直）。主人公は、すず という無名の庶民の女性。広島出身で、結婚して呉市に住んでいる。話の中心は、その女性の日常生活。悲惨さを訴えた作品として評価され

ました。この映画をきっかけに、NHKは、「#あちこちのすずさん」というキャンペーン番組を、テレビ・ラジオで10本以上制作しましたが、これらの番組も加害のことは一切取り上げておらず、戦時中の庶民の生活における悲喜こもごもが詳細に描かれるのみ。これは問題だと思います。

他方で、戦争はいつ起きたのか？ 何故起きたのか？ 日本は何故、戦争を仕掛けたのか？ 日本は何故、どの国に原爆を投下されたのか？ このようなことについて、何の説明もなされず、戦争は極めて抽象的にしか語られていません。戦争記憶の脱歴史化・脱文脈化とはそういう意味。一般論的な、「戦争は悲惨だ、戦争は繰り返してはいけない」のメッセージを次世代に引き継ぐのか？ 戦争について、「どのような」記録を、「なぜ」継承するのか。もうすぐ戦後80年ですが、改めて、「八月ジャーナリズム」は、そこが問われています。

手塚千鶴子氏



■戦争をめぐる短歌における怒り不在と悲しみ

はじめに：短詩系ゆえにリアリティの一瞬を切り取りかつ愛唱性を持ち、今も多くの人に愛される短歌こそ、「あの戦争」との向き合い方を鮮明に照らすのではないかと、原爆詠、戦争詠と、多様なテーマ、作者、年代にまたがる短歌を引き、そこに現れた戦争との向き合い方を問いたい。

<戦争詠+α>

幾度か逆襲せる敵をしりぞけて 夜が明け行けば涙流れぬ (渡辺直己)
壕の中に坐せしめて撃ちし朱占匪は 哀願もせず眼をあきしまま (同上)
ひきよせて寄り添うごとく刺ししかば 声も立てなくくづをれて伏す (宮終二)
敗戦を終戦というまやかしを 許さず日本破れたるなり (川口常孝)
戦争の責任ぼかされて歪みゆく 時代の流れを正すすべなし (渡部良三)

<原爆詠>

石炭にあらず黒焦の人間なり うずとつみあげトラック過ぎぬ (正田篠枝)
可憐なる学徒はいとし瀕死のきはに 名前を呼べばハイッと答へぬ (同上)
丘にたてば瓦礫焼土を一筋に 流るる川の秋陽に光る (同上)
頒けやりし水飲み足りて言ひし一語 幾夜聞えき「おじちゃんは親切ね」(竹山広)
苦しみに堪ゆる事のみ教へられ 斯くは静かに死してゆきしか (歌集「広島」より)

<「角川現代短歌集成4巻 社会文化詠」>より

*死者への想い、溢れ出る悲しみ、哀しみ
絶ちがたき一つ思ひの夢に来て 野に焼きし戦友が火に起ちあがる (湯本竜)
戦に沈みし船の幾千の 死者らが夜の船底たたく (井口世津子)
戦争の日の堪へがたかりし寂しさの 何にうつつに今よみがえる (柴生田稔)
戦争の記憶はいまも切なくて 残花残月残死もろもろ (尾崎左永子)

*圧倒的に少ない怒りや敵を詠んだ歌

手榴弾握りし儘に朽ち果てし 骨も見つかる沖縄の惨 (仲本将成)
胸内を深く突き刺し抜きあへぬ 棘の痛みよ原爆ドーム (宮坂和子)
ガダルカナルの密林の黄の兵を 撃つ米兵ガム噛める見ゆ (大林明彦)
投下する者の瞳に輝きて 美しかりけん広島の川 (松村正直)

*銃後のつましい暮らし、戦後の自省

褐き砂糖に梅干し載せて 菓子のない粗茶のみなりき戦近づく (中井川康文)
戦争に失ひしものひとつにて リボンの長き麦藁帽子 (尾崎左永子)

原爆を落としし国に随 (したが) ひて 安らぐ空かすみたなびく (斎藤祥郎)

平和かも夏の夜空に咲く花火 まためぐりくる敗戦記念日（吉田秋陽）

考察：

戦中、戦後に専門歌人と一般人が詠んだ、悲惨な原爆体験、敵と相まみえる戦場体験、つましい銃後の暮らし、戦後の想いなど、多様な歌である。しかし戦争を始めた原因や、原爆投下をふくめ非道な戦争遂行の責任を、自国政府や米国に迫る歌は少ない。それでは、凄まじい原爆の災禍、過酷な戦場の現実をすべて「仕方がない」と捉えることになりやしないか。

荻本快氏

■神話的思考から「喪の作業」を考える

戦争に深く関心を持つようになったきっかけは、カウンセリングの駆け出しの頃、戦争中のトラウマを持つ、80歳代の女性の患者に出会ったことなどがあります。カウンセリングは、患者様の話を聞くだけではなく、巻き込まれて、信頼関係を築くことが大切です。戦争とトラウマの関係について、プーチンは、トラウマがあるのではないかと自分の許容範囲を超えて、圧倒される経験を持つと、被害者だと認識してしまう。なぜ、イザナギ・イザナミ神話なのか？心理学者は、理由を探そうとします。心の奥を探そうとするのは、歴史を遡るのと似たようなもの。日本の社会を遡ると、どんな物語があるだろうか？イザナギ・イザナミ神話に行きつきます。以下について、解説いただきました。



- ・私の方法論 精神分析・サイコセラピーはタイムマシン
- ・プーチンのトラウマ
- ・日本における被害者神話ーイザナギ・イザナミ神話ー
- ・被害の神話的思考 被害者アイデンティティ・被害者ナショナリズム
- ・三角関係の発達心理学理論
- ・加害者でもあり、被害者でもあり ー満蒙開拓団についてー
- ・リフレクションの回復ー共感する能力についてー

おわりに：

手塚千鶴子先生から、「過去の『あの戦争』だけではなく、戦争の絶えない時代においても想いをめぐらせる機会になればと願っております」とのメッセージをいただいております。



(国際学術文化委員会 担当常任理事 佐藤律子)

(P.1 「忘れられない事件」から続く)

ど持っていなかった」と語ったということです。ビンラディン氏はパキスタンに潜伏していたところをアメリカ特殊部隊が急襲して殺害、遺体は米軍機から海中に投棄されたと報じられました。

現在、ウクライナや中東などで情報戦や情報統制が続いています。こういう時こそ、他国の文化を知り、尊重しようとするユネスコのような活動が大切と感じています。

日本の伝統文化「ゆかた着付け」実演と体験

講師：高橋優子（ハクビ京都きもの学院 銀座校 院長兼校長）

日時：2024年6月22日（土）13:30～16:00

会場：港区立生涯学習センター 203号室

- 内容：1. 代表的な着物の説明
2. 講師によるゆかたの説明
3. 着付けのデモンストレーション
4. 着付けの練習
5. ゆかたを着ての座礼、立礼、美しい歩き方の練習
6. ゆかたのたたみ方

今回のイベントでは、参加者20名のうち、12名が外国籍の方でした。国籍はドイツ（4人）、モザンビーク、その他アフリカ諸国の方々でした。

ハクビ京都きもの学院の高橋優子先生やアシスタントの先生方の丁寧なご指導のもと、浴衣の着方や帯の結び方のコツをわかりやすく教えていただきました。また、裾をひらひらさせずに歩くコツや、お辞儀の仕方、浴衣の畳み方なども指導していただき、参加者の皆様だけでなく、私たちスタッフも充実した時間を過ごしました。

特に印象的だったのは、ドイツから参加されたお母様と小学生の娘さんが、自分自身の浴衣を持参していたことです。その熱意と準備の細やかさに感心しました。参加されたドイツ人の女性が「すばらしかった」と感想を述べるなど、誰もが笑顔で満足そうでした。



このようなイベントを通じて、異文化交流の大切さや、日本の伝統文化の魅力を再確認することができました。今後も、こうした活動を続けていきたいと考えています。

（文化体験教室委員会 担当常任理事 田川純子）

大学ユネスコクラブ全国サミットへの参加報告

月日：2024年7月13日（土）

会場：玉川大学キャンパス

この度、港ユネスコ協会が毎年12月に開催している「日本語スピーチコンテスト」への参加協力を通してお付き合いのある玉川大学のユネスコクラブでご指導に当たっている小林先生から、全国の大学ユネスコクラブが玉川大学（右写真）へ集結して、サミットを開催するので、参加しませんかとお誘いを頂いた。毎年来て頂くばかりで、こちらから出向いたことのない一方通行の関係を解消すべく、当協会の日本語スピーチコンテスト委員会の田川委員長と私（石合）が参加することになった。



玉川大学内の教室に、奈良教育大学、青山学院大学、玉川大学の3大学から集まった20名ほどの大学生が出席。小林先生からあらかじめ紹介されていた玉川大学ユネスコクラブの岡本さんによる進行の下、それぞれの大学におけるユネスコ活動に関する発表があった。

まずは奈良教育大学から、地元企業や小中学校とつながり、永続的な活動を地道に続けているとの発表があった。ボランティア活動は人の数と知の奥行きがあればあるほど良いのであって、ひとりの両手と判断だけではなかなか捗がいかないものである。そして年齢層も広い層からの参画があれば益々良いのだから、企業や教育機関を巻き込んだ活動は、まさにボランティア活動の理想形であると感じた。

たとえば、ユネスコクラブで夏休みの校外イベントを企画し、これに賛同する企業に経済的支援をお願いし、現場の運営は学生たちが取り仕切る。当日になれば参加する小中学生、ときには高校生たちも一緒になって、日本と世界の未来を指向する活動や考察を行うといった具合である。

発表を聞いているうちに、こちらまで希望と感激で胸がいっぱいになった。通路を挟む向こうに着席している田川氏をちらりと見たら、目をキラキラさせてスクリーンを凝視し、学生の発表に聞き入っている。よしよし彼女も感激中だ、と嬉しくなる。

そして玉川大学からは、SDGS 推進を提唱し、サークル内でイベントの企画と運営を実施し、毎回ユネスコ活動についての考察会を行っているとの発表があった。「未来へ向けて今私たちができること」をテーマに、ランチタイムを利用してクラブメンバーの親睦を深め、活動案を練り、その環を広げる努力の姿勢は、湿った涙ぐましいものではなく、カラリと明るく軽やかなのだ。

彼らは輝く笑顔で私や田川氏にも「ぜひ一緒に何かやりましょう！」と、携帯の画面を差し出し、だからこちらも嬉々としてQRコードを差し出し、自己紹介がさっさと終わる。平成の時代なら「名刺交換」と「各自の力量が試される世間話」であった自己紹介が、いまはQRコードで事足りる。紙の無駄はなく、荷物も少なく、紛失の失礼もないこの手軽さは、地球にとっても人間

社会にとってもありがたい。これはどなたの名刺だったか？ と、ひとしきり考えてから破り捨てる失礼は、ひとりの作業とはいえ気分が塞ぐいやな行為である。デジタルネイティブ世代にはこんな話は野暮ったいかな？ などと思い失笑する。

青山学院大学のクラブは今年設立されたことから、心構えとクラブの命名「Le Lien(ルリアン)」についての説明があった。こちらの活動はまだ少ないものの、発信したい情報がたくさんあることは、交換される Instagram を拝見すればよくわかる。

今日の大学生たちは、個々に情報を発信することや受信することを幼少時から経験しているため、実によくツールを使いこなし、理解している。なので、眺める此方側に心配させる脆弱性がみあたらない。情報という「なまもの」の取り扱い方法をよく心得ている彼らのなんと頼もしいことか。彼らはこうやって世界とつながり、それぞれの価値観と情報を共有する。彼らの小さな一歩はデジタルに乗って、あっという間に世界をめぐり、たくさんの協賛と共感を携えて戻って来る。大学生たちはそういった情報を一瞬で精査しながら、彼らの活動をどんどん前進させてゆく。

発表のあとはランダムに分かれてグループワークを行った。平成時代の私がいつでもラップトップを携帯していたように、彼らはタブレットを携帯し、それを操作しながらディスカッションをする。ひとしきりタブレット・アクセサリの話しで盛り上がったあとに、これからの夢を語り合った。ギーク・トークがアイスブレイクになるとは、まさに目からウロコであったが、これはこれで面白い。こういう世代がユネスコを動かす時代なのだと心強く感じた。

そして話し合いが始まってみれば、彼らの語る夢や思いの丈は、たしかに私が若い頃に思っていたのと大差はない。やはり未来を良くしたい、世界を平和にしたいのだ。使うガジェットは変われど、やるべきことと人の思いは変わらない。だからこそ世代を超えて未来を語るができるのだろうし、活動のモチベーションは情熱を共有する連帯感によって維持されるのだ。



最初から最後まですべてが新鮮で刺激的だった大学ユネスコクラブ全国サミットに参加する機会を与えて頂き、心からの感謝を申し上げる次第である。

(日本語スピーチコンテスト委員会 副委員長 石合和世)

2024年度第一回 世界の味文化紹介

メキシコ料理教室

講師：カーラ・ヘリナンデズ氏

日時：2024年7月28日（日）12時～15時30分

会場：港区立男女平等参画センター「リーブラ」料理室

参加者：区民20名、スタッフ6名、通訳1名

講師のカーラ・ヘリナンデズさんは、メキシコに生まれ、アメリカで育ち、2022年に来日されました。現在は日本の学校にて英語教師として勤務されています。毎年夏になるとメキシコの祖母の家を訪ね、教えてもらったメキシコ料理のレシピを今もご家族に作り続けているそうで、今回は本格的なメキシコ料理を日本の家庭でも作れるように教えていただきました。

味文化紹介：

先住民族の料理とスペインから持ち込まれた料理を起源とするメキシコ料理は、2010年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。アボカド、トマト、カカオ、バニラ、トウモロコシはメキシコの代表的な食材です。特に食べることが大事とされているのは、国旗にも描かれているノパレス（食用サボテン）です。

今回のメニュー：

- ①メキシコ風野菜スープ→鶏肉とブイヨンで煮込む野菜たっぷりのスープ
- ②サボテンのサラダ→粘りがあり、シャキシャキとしたサボテンのサラダ
- ③鶏肉のソペス→厚めのトウモロコシの生地、具とソースをのせた料理
- ④お米のミルクデザート→牛乳でお米を煮るデザート
- ⑤ハイビスカスウォーター→赤色が鮮やかな酸味のある冷たいドリンク



今回は英語での講義でしたが、ご友人の及川友利江さんが同時通訳をしてくださいました。サボテンなど、私達が普段なかなか口にすることがない食材を紹介してくださり、本格的なメキシコ料理を楽しむことができました。貴重な機会をどうもありがとうございました。

（世界の料理委員会 副委員長 山澤絵海）

港ユネスコ協会 2024年度 秋季の開催事業紹介

港ユネスコ協会 2024年度 第2回国際理解講演会

講演内容

この秋、東京国立博物館で特別展「はにわ」(2024.10.16-12.8)を開催いたします。その担当者が特別展の見どころを伝えます。特別展にも出品する、港区芝公園内にかつてあった古墳から出土した埴輪についてもお話しします。

講師



東京国立博物館主任研究員
河野 正訓 氏
かわの まさのり

講師プロフィール

1981年山口県下関市生まれ。明治大学や京都大学大学院で考古学を学ぶ。京都大学の博士(文学)。明治大学古代学研究所の後、2014年以降、東京国立博物館に勤める。現任、学芸研究部調査研究課考古室の主任研究員。

はにわを楽しむ



国宝/埴輪 挂甲の武人
群馬県太田市飯塚町出土。古墳時代・6世紀。東京国立博物館蔵



埴輪 首飾りをする女子
東京都港区 芝山崎8号墳出土。古墳時代・6世紀。東京国立博物館蔵



埴形埴輪
栃木県真岡市 高塚古墳出土。古墳時代・6世紀。東京国立博物館蔵



重要文化財/子持家形埴輪
富前県西都市 西経原古墳群出土。古墳時代・5世紀。東京国立博物館蔵

■日時:2024年

10月26日(土)

◆14:00~16:00
(受付開始/13:30)

■会場:

リーブラホール
東京都港区芝浦1-16-1
みなとパーク芝浦1F

■対象:港区在住、在勤、在学、会員、一般の方(中学生以上)

■定員:150名(申し込み先着順)

■参加費:無料(但し事前登録が必要です)

■申込み方法:ホームページから、または往復はがきに ①はにわを楽しむ ②氏名(ふりがな) ③郵便番号・住所 ④電話番号を記入の上、お申し込みください。
※往復はがきのみ10月18日(金)必着

■受付開始:2024年8月1日(木)

●お申込み・お問い合わせ先

港ユネスコ協会 〒105-0004東京都港区新橋3-16-3

港区立生涯学習センター 3階

※お問い合わせ・お申込みは、ホームページから推奨します。

港ユネスコ協会 検索 ※Websiteが更新されました。

TEL:03-3434-2300

Eメール:m-info@minatounesco.jp

受付時間:火曜日~金曜日(祝日を除く)午前10時30分~午後5時

●ユネスコ活動に参加してみませんか? **会員募集中!**



●JR田町駅 芝浦口(東口)ペDESTリアンデッキ(連絡通路)徒歩5分
●都営地下鉄三田駅 AB出口/徒歩6分

主催 港ユネスコ協会 共催 港区教育委員会
後援 公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟・東京都ユネスコ連絡協議会

事務局便り

【ようこそ新入会員】

前回以降、4名の新入会員が加わっていただきました。

【開催中・募集中の事業】

☆日本語講座 (Summer Term) 田川純子先生 6/13 スタート (土曜日 10:00～) 10回

☆ビジネス英会話講座 Robert Edward Shiffer 先生 7/25 スタート (木曜日 18:30～20:00) 全9回

☆TOEIC対策講座 中沢萬佐雄先生 7/1 スタート (月曜日 18:30～20:00) 全9回

*語学教室の開催場所：港区立生涯学習センター3階 港ユネスコ協会事務局内

☆茶道入門講座 小野 宗恵先生 4/22 スタート (第四月曜 14:00～16:30) 全6回
港区立生涯学習センター2階 203号室

【今後の事業予定】

☆10月5日(土) 13:30～16:00 「書道体験教室」
会場：港区立生涯学習センター304号室、講師：金田 翠夢氏

☆10月12、13日(土、日) みなと区民まつり
会場：芝公園

☆10月18日(金) フェスティバルーン
会場：グラウンド

☆10月26日(土) 14:00～16:00 第2回国際理解講演会「はにわを楽しむ」
会場：港区芝浦 リーブラホール
講師：河野 正訓氏

☆11月9日(土) 13:30～16:00 「いけばな 実演と体験」
会場：港区立生涯学習センター101号室、
講師：中村 正和氏

☆11月10日(日) 12:00～15:30 世界の味文化紹介「台湾料理教室」
会場：港区芝浦 リーブラ料理室

☆12月1日(日) 17:30～20:30 「インターナショナル・ウィンターパーティー」
会場：港区立「伝統文化交流館」(港区芝浦一丁目)

☆12月8日(日) 13:00～16:00 「第八回 日本語スピーチコンテスト」
会場：港区芝浦 リーブラホール

☆12月14日(土) 「東京の森川海を知る」
会場：クルーズ船

☆12月21日(土) 「ワークショップ(仮題)」
会場：港区立生涯学習センター101号室

☆1月18日(日) 「世界の味文化紹介「大学生によるお魚料理教室」
会場：港区芝浦 リーブラ料理室

☆1月21日(火) 18:00～21:00 『シンポジウム「ユネスコの教育勧告」(仮題)』
会場：国際文化会館 西館4階セミナールーム

☆1月25日(日) 「茶の湯体験教室」
会場：港区立生涯学習センター203号室

☆2月24日(月・祝日) 第3回国際理解講演会「ドイツオペラ(仮題)」
会場：港区芝浦 リーブラホール

港ユネスコ協会事務局 火曜日～金曜日(祝日を除く) 午前10時30分～午後5時

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL: 03(3434)2300 TEL・FAX: 03(3434)2233

Eメール: m-info@minatounesco.jp ウェブサイト: <https://minato-unesco.jp>

